大洲高校PTA月報

平成30年３月号

会員寄稿　**読書のすすめ**

図書・研修課長　正岡　誠

『読書のすすめ』というと高校生の時に読んだショーペンハウエルの本を思い出します。

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。」
「読書とは他人にものを考えてもらうことである。１日を多読に費やす勤勉な人間はしだいに自分でものを考える力を失ってゆく。」

30年以上前に読んだ本なので記憶違いがあるかも知れませんが、上記のようなことが書かれていたと思います。読書をするなと言っているようですが、全体としては良書を読みなさい、自分で考えなさい、ということが書かれています。ただし、人によって解釈の仕方が違うようです。私は多読の方で、年間100冊は読んでいます。興味を持った作家、分野があるとまとめて読む傾向があり、ここ数年は警察小説に凝っています。高校時代は哲学書に興味を持ったことがあって、そのときにショーペンハウエルの本も文庫で出ているものはすべて読みました。

現在は情報飽和の状態といわれ、大量の情報の取捨選択、情報そのものの信頼性について判断することが困難になりつつあります。難しさは読書についても同様で、高校生が良書を選んで読み、自分で考える力を身につけるためには周りの大人の助言が必要だと思います。大洲高校の図書室には過去の先生方、先輩方が選んでくださった本がたくさん置かれています。毎年、新しい本も購入しています。保護者の方々が昔読んで良かった本が絶版になっている場合もあると思います。図書室には古い本もあります。読ませたいという本を薦めていただいて、図書室で探すように勧めてみてくだされればありがたいです。私たちも生徒たちが良書に出会えるように情報を発信していきます。